

第3章 針灸治法

針灸治法は針灸治則から発展的に導き出されてきたものである。これに関する記述は歴代の医書に数多く見ることができるが、その各篇や章の中に散見されるだけで系統だったものはなく、未整理なため、臨床に役立つのにはいささか不十分である。そこで、読者諸氏の臨床の参考に供するために、関係する文献を蒐集し、それと筆者が臨床体験で得た成果とを結び合わせて、次のような各法に概括した。

第1節 解表法

解表法とは邪氣が衛表に在るとき、発汗法を応用して邪氣を表からとり除く、すなわち「その皮にあるもの、汗してこれを発す」という治法のこと、六淫〔六氣が人体に害作用を及ぼす時、六氣と区別していう〕の外感病で、邪氣が肌表にある証に適用され、その応用範囲は広い。あらゆる傷寒や温病の初期で、悪寒、発熱、頭痛、身体痛、無汗あるいは自汗〔暑くなくても出る汗〕などの表証を伴うときには、解表法を応用して邪氣を表から解除すれば、治癒もしくは緩解させることができる。

針灸による解表法はすでに『内経』に記載されている。『素問』骨空論篇に「寒熱証に灸をすえる方法は、まず項の後の大椎穴に灸をすえる。灸艾の壮数は、病人の年齢によって決める。次に尾骨先端の長強穴に灸をすえるが、

やはり病人の年齢によって壮数を決める」とあるが、これは風寒外襲によって営衛〔営氣と衛氣の合称〕が不和となった表証には、督脈の大椎と長強の両穴を取穴し、そこに施灸することで通陽解表と去風散寒をはかると解釈できる。『靈樞』寒熱病篇には皮寒熱と肌寒熱の治法について記されている。皮寒熱については「邪氣が皮膚に在って寒熱を発すると、皮膚を寝台のゴザに着けることができない、毛髪が枯れ、鼻孔の乾燥、汗が出ないなどの症状が現れる。この治療は三陽の絡を取穴するとともに、手太陰経の腧穴も取穴し補法を行う。」とある。これは邪氣が皮膚に在るために毛竅が閉塞して引きおこされた悪寒、発熱、鼻の乾燥、無汗などの症状に対して、三陽の絡（足太陽膀胱経の絡穴である飛揚穴）を取穴して発汗作用を促すとともに、手太陰肺経の魚際、太淵などを取穴して、肺氣を補すという治法であり、太陽は表を主り肺は外で皮毛に合すということを根拠にしたものである。肌寒熱については「邪氣が筋肉に在って寒熱を発すると、筋肉の痛み、毛髪が枯れる、唇が乾燥する、汗が出ないなどの症状が現れる。この治療は足太陽経の下肢の絡穴を取って瘀血を取り除き、足太陰経の腧穴に補法で刺針して発汗を促す」とある。これは邪氣が肌表に在るために悪寒発熱、肌痛といった症状を現す表証に対しても、足太陽膀胱経の絡穴である飛揚を取穴して発汗をはかるとともに、足太陰脾経の大都、太白に補法を施して、外邪を除き肌痛を治めるという治法であり、脾は筋肉を主るということを根拠にしたものである。これらの条文は、針灸による解表発汗法にはさまざまな方法があることを提示している。

張仲景の『傷寒論』24条には「太陽病で桂枝湯を初服したのち、心煩がおさまらないときは、まず風池穴と風府穴に刺針してから桂枝湯をひきつづき服用すれば疾病は治癒する」とあり、解表に針灸を応用しているのを見とることができる。

『針灸甲乙経』六経受病発傷寒熱病（六経病を受け傷寒熱病を発す）篇には、外邪を感受したことに起因する悪寒、発熱、頭痛、身体痛などの表証の針灸治法が、数十にものぼる条文として列挙されている。それを見ても、当時、解表の針灸が広く応用されていたことがわかる。

この後、『針灸資生経』では「汗不出」、「傷寒無汗」などさまざまな原因によっておこる無汗症状に対して、異なった腧穴を用いた発汗治法を示して

いる。『針灸大成』では多汗、少汗、無汗などの治法について論じているが、その中で用いられている腧穴も、主に督脈と三陽経の腧穴である。

承淡安の『傷寒論新注』には、桂枝湯証に風府、風池、頭維、外関、合谷を取穴し、麻黄湯証に合谷、経渠、風府、風池を取穴する針灸処方が示され、その処方意義も論じられているが、これらは着目する価値を有するものである。このほか、合谷、復溜の両穴は従来から発汗あるいは止汗の要穴とされ、表証の治療穴として広く応用されてきている。

次に臨床でよく用いられる解表法を病因にもとづいてそれぞれ述べる。

1 温散解表法

風寒の邪が外襲して肌表を外束し、衛気の流れが抑止されることによっておこる表証に用いる。悪寒、発熱、頭痛、身体痛、無汗、浮緊脈、薄白苔などの症候が現れる。取穴は大椎、風池、合谷、飛揚などで、針で瀉法を施し、刺針後、施灸を加えて発汗解表をはかる。

2 清熱解表法

風熱の邪が外襲し、肌表に鬱滞することによっておこる表証に用いる。風は陽邪であり、陽が熱化すると、発熱と悪風〔風を嫌う〕、発熱が強く悪寒は軽い、頭痛、咽の痛み、口の乾きなどの症候が生じる。風熱の邪気が肌表に客し、腠理〔皮膚と筋肉の接する所〕の緻密さが失われるので、発汗が見られるが、解熱はせず、浮緊脈、黄苔などの症候が見られる。取穴は外関、合谷、大椎、曲池、復溜などで、針で瀉法を行い、くりかえし行針〔別名運針。刺針後に得気や各種の補瀉を目的として針を動かすこと〕を施して針感を強め、風熱の邪をとり除く。

3 化湿解表法

外感の湿邪が肌表に留滞し、衛陽が抑止されておこる表証に用いる。身熱不揚〔皮膚に触れると最初は熱くないが次第に手に熱感が伝わってくること〕、悪寒、少量の発汗、肢体や関節のおもだるい痛み、帽子をかぶったような頭重感と頭脹感、胸ぐるしさ、上腹部のつかえ感、悪心嘔吐、食欲減退、腹脹、便瀘〔水様便〕、白膩苔、濡脈〔やわらかい意味であればジョ、ニョ、ゼン、ネンなどの読みが考えられるが、通常、ナンと読ませる〕などの症候を呈す。取穴は外関、合谷、陰陵泉、足三里、中脘などで、針で瀉法を施す。

4 清暑化湿法

外感の暑邪は必ず湿を伴う。暑湿の邪気が表を損傷すると、悪寒と発熱、少量の発汗、あるいは発汗をみても解熱しない、ひどいときは高熱、口渴、心煩〔心中の煩悶感〕、赤色尿で尿量減少、泛悪〔むかむかして胃液が口にこみ上がる〕、黄膩苔、濡数脈などの症候が現れる。取穴は大椎、合谷、曲池、曲沢、委中などで、針で瀉法を施す。または肘窩と膝窩の静脈を刺絡して瀉血し、暑熱の邪を宣泄する。

このほか、慢性疾患や加齢などで身体が虚弱な状態になっているときに、外邪を感受すると、悪寒、身熱〔全身の発熱〕、頭痛、無汗などの表証の症候のほかに、全身の虚弱症状を伴うことが多いので、解表法を応用する場合には、気虚、陽虚、陰虚など異なった情況に分けて、それぞれ気海、関元、足三里、三陰交などを組み合わせて正気を扶助し、正気を傷つけないようにして去邪をはからなければならない。